



落語を演じる



会員 金井 孝雄 (27期)

志ん生（古今亭志ん生 1973年没）の後に落語なしといわれます。私も、志ん生が亡くなって、落語家が一人も居なくなったとの思いに賛同しているひとりです。

いま、落語ブームといわれていますが、落語をお笑いであると勘違いしているが故に、一人漫才師のような、落語家と称されている方々しかおられません。

落語はファニーではなく、インタレストの世界です。ゲラゲラ笑うものではありません。また、落語を聴く側にも、真の落語家を生まない責任があります。ダチャレや下劣な話に、せっかく笑うために、ストレスを解消する為に来たのだから、笑わなければ損とばかりに。あるいは、演者が一所懸命やっているの、笑ってやらねば……との気遣いから、おおげさに

愛想笑いをします。あま金が多すぎます。

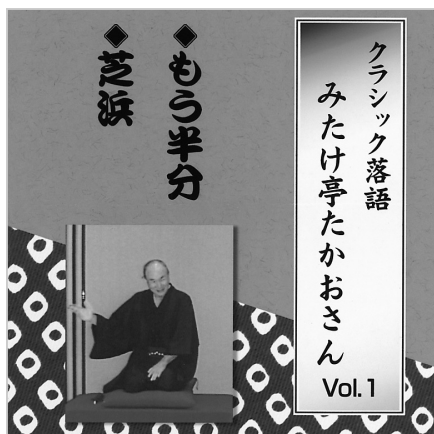
落語は、聴く人があってこそその芸です。落語には、何より“間”が大事といわれます。これは、聞き手が、演者の話から、聞く方それぞれの世界を描き、そこで可笑しみや悲しみを感ずる時間です。落語は、聴き手と演者とのコラボレーションです。

私は、10年程前に落語をはじめました。東大落語会の労作である落語事典によれば、1260篇ほどの古典落語があるそうです。しかし、志ん生も言うように、インタレストな古典は、数えるほどしかありません。その内の数篇を、アレンジしてCDにしました（ちなみに、私の噺家名は、みたけ亭たかおさん）。

CDにした咄のひとつ「もう半分」は経営の苦しい酒屋夫婦が、五十両をネコババします。世の中で、恐いのは、オバケではなく自分の心の中にある悪魔だという咄です。「芝浜」は、有名な古典ですが、熊さんが、財布を拾ったのが夢だと思い込む不自然さを、私なりに解消できたと思っています。

落語のライブ（といっても、身内や友人達が主な聞き手で、「寝床」の現代版との評があるのではと危惧しています）や収録をするときは、自分の顔が真赤になります。これは、最近、自分をも忘れることが多くなり、秘かに進行しているのではないかと不安がよぎるボケの防止に有効と確信しています。

なお、CDご希望の会員・事務職員の方には謹呈申し上げますので、ご連絡下さい。



CD ジャケット